海賊王を支えた赤白龍皇帝

グリフィン・冬

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

小さい頃からずっと同じ夢を見た、そんなある日に神様のミスで死んでしまった俺は神様から平行世界チート特典のチート特典を二つ貰いある世界に転生した。

その世界は、小さい頃からずっと見ていた夢の世界でしかも夢を語り合った少年がいる場所だった!!

この物語は、海賊王になった少年を支えた神から貰った赤と白の龍が封印された神器を宿し赤白龍皇帝と呼ばれた男の話である。

タイトルと話の内容を変えました。

目次

第一章：東の海編
旅を開始しました　1
ロロノア・ゾロ1　6
ロロノア・ゾロ2　15

第一章：東の海編
旅を開始しました

ルドルフｓｉｄｅ

この１０年間色々な事が合ったが、それは後々語るとして今俺とルフィは海賊になる為に村から出て知り合いの漁師さんから小舟を貰って村から出て少し経った場所に俺達はいた。

「やー、今日は船出日和だなー」

「おい、ルフィ……」

「何だよ、ルド」

「何で……小舟にしたんだよ!!もうちょっと大きな船を漁師さんがくれるって言ってたじゃないか!!」

本当は、小舟では無くもうちょっと大きな船を漁師さんがくれるって言ってたのだがルフィが小さいのでって言いやがったので俺達は小舟で只今海の真ん中に漂流中であ

る。
「だってよ、旅を続けていけば大きな船がその内必要になるけど今はこの小舟で良いかなって思ったんだよ。」
「何だよその理由は!?」
流石の俺はルフィのその理由にイラッときてルフィにそう言うと
「良いじゃんか、この小舟でよ。それに船長は俺だ!!」

ルフィはそう俺にそう言った。
「ハァー、分かったよ。初めての船長命令だし副船長の俺はお前(ルフィ)の指示を聞くのが役割だからな。」
ルフィに俺はそう苦笑いしながらそう言った時……
ザバァ!!
「わっ／お?」
海の底から音が聞こえた瞬間１０年前に見た近海の主が俺達の目の前に現れた。
「久しぶりに見たな。」
「確かに、だけど相手が悪かったな。ルド手を出すなよ?」
「分かってるよ。コイツはお前が倒さないと旅が始まったとは言わないからな」

俺はそうルフィに言った。

「あぁ、近海の主にあの時と違って１０年鍛えたおれの技を見せてやる!!」

ルフィは、そう言って俺達に向かって襲ってきた近海の主に……

「ゴムゴムの……銃(ピストル)!!!!」

ルフィが放った拳が近海の主の顔に直撃し近海の主は倒れた。

「にっ、思い知ったか魚め!!」

「で?これからどうするんだ、ルフィ」

近海の主を倒したルフィに、俺はこれからの事を聞いた。

「んん…!!まずは仲間集めだ。１０人はほしいなァ!!」

「確かに、剣士に航海士にコックに狙撃手に船医に船大工に考古学者に音楽家は必要だよな。」

「あぁ、そして俺達船用の海賊旗!!」

「確かに、俺達船用の海賊旗は必要だな」

「よっしゃいくぞ!!!!海賊王におれはなる!!!!」

「俺は、お前(ルフィ)を絶対に海賊王にする。」

俺達は、小舟でそれぞれ初心表明で自らの夢を叫んだ。

「な、ルフィ」

「何だ?」

「どうしたら、大渦に呑まれるんだよ!!」

俺達は、あの初心表明した後ルフィが真っ直ぐ行くぞ!!と言い真っ直ぐ進んでいたら大渦に捕まって今その大渦に呑まれようとしている現状である。

「うん、うかつだった」

「お前のせいだよ!?って、突っ込みしている場合じゃない」

ルフィに突っ込みしている間にもどんどん大渦に小舟がのみ込まれていて俺は『白龍皇の光翼(ディバイン・ディバイディング)』を早めに展開し上に浮かび上がってルフィの前に手を差し伸べた。

「ルフィ、早く俺の手を掴め!!」

「分かっ……わ!!」

「ば、馬鹿野郎!!」

ルフィは、差し伸べられた俺の手を掴む前に大渦に遂に呑み込まれた。

「チッ、アルビオン!!」
　俺は、大渦に手を突っ込みアルビオンの力を展開した。
〔Ｄｉｖｉｄｅ(ディバイド)！Ｄｉｖｉｄｅ(ディバイド)！Ｄｉｖｉｄｅ(ディバイド)！Ｄｉｖｉｄｅ(ディバイド)！!!〕
　何とかアルビオンの半減させる力で大渦を消滅させる事ができたのだが……俺の目の前には俺達が乗っていた小舟の残骸が浮かんでいた。
「チッ、あのアホ早く俺の手を掴めって言ったのに……」
　俺が愚痴っているとドライグとアルビオンが俺に喋りかけてきた。
〔おい、相棒(ルド)。まだルフィが死んだとは限らないんだ…見聞色で探せば良いのではないのか？〕
〔ドライグの言う通りだ…〕
　アルビオンとドライグにそう言われて俺は……
「そうだな、よし!!あのあほ見付けたら少しはフフッＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆してやる!!」
　ドライグとアルビオンは、ルフィの再会時の不幸な出来事に二匹は神にルフィが無事に済むように祈ったのである……

ロロノア・ゾロ1

ルドルフが、ルフィにO☆SHI☆O☆KI☆すると言って見聞色の覇気でルフィの気配を見付けてそこに向かっている時ルフィは……

ある島で、厳(アルビダ)ついおばさん率いる海賊船に誤って入って雑用をしていた少年コビーを助けて一緒にある島に向かっていた。

「ルフィさん、本当にロロノア・ゾロを仲間にするんですか?」

「あぁ、もう決めた。」

ルフィは、コビーにそう言った。

「えっーと、ルドルフさんでしたけ?その人を待ったなくて大丈夫何ですか……」

「ま、別に待ったなくてもルドなら大丈夫」

ルフィがそう言った時……

「何が俺は待ったなくても大丈夫なのかな、え?ルフィ君(黒笑)」

「ぃえっ」

声が聞こえてルフィは、小さく声が漏れ顔から大量に汗を吹き出しながら壊れた機械

みたいにギッギッギッと首を上空に向けて見たらそこには白龍皇の光翼を背中に展開しながら黒い笑みを浮かべながら上空に浮かんでいるルドルフがそこにいた。

「るるるるる、ルド!?何で此処に居るんだ……」

ルフィは、ルドルフにそう言うとルドルフは船に下降しルフィに近づいて……

「テメェが、大渦に呑まれた後にお前の気配を探(見聞色の覇気で)してお前の気配を見付けて急いで向かって来たに決まってるだろうが!!」

ルドは、ルフィにそう言って両腕に薄く武装色の覇気を纏わせてルフィの眉間をグリグリとさせた。

「ギャアアア、ルド……痛いから止めてくれ。」

「で？」
「ごべんなざい、もヴじまぜん」
と、ルフィはボコボコにされてルドに謝った。

「で、君はそこでアホして俺にボコボコにされたアホのお陰でその厳ついおばさん率いる海賊から抜ける事ができたと？」
ルフィにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆した後、ルドはルフィと一緒にいた少年コビーに

今までの経緯(いきさつ)を聞いていた。
「はい、ルフィさんのお陰でアルビダ率いる海賊から抜ける事ができました。」
「そうか……おいルフィ!!」

ルドは、ルフィを呼び
「ロロノア・ゾロ仲間にするぞ。」
「えぇっー!?」
「おー、流石ルド!!」
ルドが、ルフィにロロノア・ゾロを仲間にすると言ってコビーは驚きルフィは物凄く喜んでいた。

「ルフィさん、ルドルフさんもロロノア・ゾロは〝海賊狩りのゾロ〟と言う異名をもつ恐ろしい奴で血に飢えた野犬のように賞金首をかぎまわり海をさすらう男で人の姿をかりた〝魔獣〟だと人々の間で噂になっています。」
「魔獣ねーっ」
「……」
「まさか、ルフィさん達本気でロロノア・ゾロを仲間にしようだなんて思ってないですよ

ね？」

「別にルフィが決めた事なら副船長の俺はそれに従うだけだし」

「もし良いやつだったら……」

「悪い奴だから捕まってるんですよ!!」

「やっと着いた、シェルズタウン」
　ルフィ達は、目的地であるシェルズタウンに着いた。
「いやー、コビーお前すごいな」
「え？」
「ちゃんと目的地についたよ！」
「当たり前ですよ！航海術は海に出る者の最低限の能力です！ルフィさん達だって毎度漂流してちゃ海賊になんてなれませんよ。せめて航海士を仲間にしないと」

「ああ、そうする!!それとメシ食おう」
「そうだな、腹が減ったし」
「そうですね、取り合えず何か食べましょうか。」
　ルドルフ達は、シェルズタウンの飯屋に向かった。

「そう言えば、コビーは海軍に入るんだよな？」
「はいそうですよ。」
「じゃ、この町でコビーとはお別れだな！海軍に入って立派な海兵になれよ！」

「はい…!!ありがとうございます。ルフィさん達も立派な海賊になって下さい。いずれは敵同士ですけど」
「そういや基地にいるのかなあの…ゾロって奴」
ルフィがゾロの名前を言った瞬間……
ガタン!!

「……!!」
「……?」
「……」
コビーは、お店に居た客の反応からルフィ達に小声で話しかけた。
「ここでは、ゾロの名は禁句のようですね……」
「ふーん」

「さっき貼り紙を見たんですけどここの基地にはモーガン大佐と言う人がいて」
今度は、コビーがモーガン大佐の名前を言った瞬間……
ガタガタァン!!
「え?!!」

「おお!!」
「……」
　ルドルフ達は、客の反応からお店に居づらくなりお店から出た。
「かっはっはっはっはっはっはっはっはっはっおもしろい店だったなーっ。おれ後でもっかい行こうっ」
「そんな面白かったか?」
「妙ですよ…!!ぼく、なんだか不安になってきました…!!いつ脱走するとは限らないロロノア・ゾロの名に過敏になる気持ちはわかりますがなぜ海軍の大佐の名にまで怯えるんでしょうか!!」
「さあなーなんかノリで吹っ飛んじゃったんじゃねェか?」
「そんなわけないじゃないですか!!ぼくは、まじめに言ってるんですよ」
「そのモーガン大佐が、この町で恐怖政治をしているから先の店に居た客達はゾロの名を出した時みたいにあんな反応したんじゃないか?」
　ルドは、そうコビーに言った。
「そうでしょうか……」

「そんな事より着いたぞ、海軍基地に」

ロロノア・ゾロ２

「……!!」
「近くで見るとゴッツイなー」
「確かにな……」
　俺達は、町にある海軍基地に着き海軍基地の門の前で海軍基地近くから見てルフィの問いに確かにと返事をした。

「いけよ!コビー」
「そういえば、ここでコビーとはお別れか……」
「えっーとですね、実はまだその…心の準備が…!!さっきの一件もありますし…」
「まあ良いんじゃないかな、コビーの心の準備ができたら海軍に入隊すれば良いと思うよ。」
　と、コビーにルドはそう言った
「あ、ありがとうございます、ルドルフさん。」

「別に、お礼な「おーい、話は終わったか？」んて…って、ルフィお前何やってるんだよ!!」

「見て分かんないか、魔獣(ゾロ)って奴を探しているに決まってるだろ」

ルドの問いにルフィはそう言った。

「ルフィさん、流石にそこから覗いて見える様な所には居ませんよ。きっと奥の独房とか」

「いや！なんかいるぞ向こうに!!魔獣(ゾロ)かもな」

「え……!!!」

「そんなアホな……」

ルフィは、コビーとルドにそう言って何かいるかも知れない場所に向かいコビーとルドはルフィのその問いに否定的に言いながらもルフィの後を追った。

「ほら、あいつ」

ルフィは塀に少し体を預けてルドとコビーにそう言ってコビーとルドも塀に少し体を預けてルフィが見た塀の向こう側を見た。

「あ、本当(マジ)だ…」

「……!!」
　コビーは、塀の向こう側見た瞬間驚き体を預けていた塀から手を離して地面に座り込んだ。
「どうした、コビー？」
「く…く…黒い手ぬぐいに腹まき!!ほ…本物だ。本物のロロノア・ゾロです!!なんて迫力だろう…!!あれがゾロ…!!」
「ふーん、確かに少しは迫力は感じるな…」
「あれがそうか…あの縄、ほどけば簡単に逃がせるよなあれじゃあ」

　ルフィがそう言うとコビーが……
「ば…ばかな事言わないで下さいよ!!あんな奴、逃がしたら町だって無事じゃ済まないしルフィさん達だって、殺そうとしますよ。あいつは!!」
「大丈夫、俺達強いから!!」
「そう言う問題じゃ……」
　コビーがルフィにそう言うと……

「おい、お前ら」

「ん？」
「ひぃ!!」
「何だ？」
「ちょっとこっち来てこの縄ほどいてくれねェか？もう九日間（ここのかかん）もこのままだ。さすがにくたばりそうだぜ。」
「おい、あいつ笑ってるぞ」
「しゃ…!!しゃべった!!」
「意外に、元気そうに見えるけどな……」

「礼ならするぜ。その辺の賞金首ぶっ殺してててめェらに暮れてやるよ。ウソは言わねェ約束は守る」
「だ…だめですよルフィさん、ルドルフさん!!あんな口車に乗っちゃ……!!縄を解いたとたんにぼくらを殺して逃げるに決まってるんですからっ!!」
「殺されやしねェよ。俺達は強いからな」
「確かに」
　ギロリッ
「あァ!?」

「(こ…この人たちはもお～～～!!)」
　コビーが心の中でそう思っていると
　ガタッ
「ん？」
「え？」
「お？」
「しーっ」

　ルドルフの隣に梯子を置いて女の子が塀を乗り越えてゾロの方に向かった。
「あ…!!ちょっときみ危ないよ!!」
　コビーは、女の子にそう言ったが女の子はそれを無視した。
「ルフィさん、ルドルフさん止めて下さいよっ!!あの子殺されちゃいますよ!!」
「自分でやれよそうしたいなら」
「あのさ、他人に任せるんじゃなく自分で助けろよ。それで良く海兵になりたいって言うよな」
「……」

ルフィとルドは、コビーに冷たくそう言った。

「オイ、何だてめェ。殺されてエのか…消えなチビ!!」
「あのね、私おにぎり作って来たの！お兄ちゃんずっと、このままでおなか空いてるでしょ？私はじめてだけど一生懸命作ったから…」
「ハラなんかへっちゃいねェ!!そいつ持ってとっとと消えろ!!」
「だけど…」
「いらねェっつったろ!!帰れ!!踏み殺すぞガキ!!」

ゾロが女の子にそう怒鳴った時
「ロロノア・ゾロ!!!イジメはいかんねェ。親父にゆうぞ」
「！」
「！」
「また変なのが出たな」
「何だ？あの親の脛かじり七光り金髪マッシュルームヘヤ顎割れＤＱＮは」
「ルドルフさん何ですか、その長い変なネーミングは…あれは、きっと海軍のえらい人ですよ…よかったあの子殺されなくて…」

「おやおやお嬢ちゃんここに書いてある看板読めないのかな？まあ良いうまそうなおにぎりだなコイツに差し入れするより俺が食ってやるよ」
「あ！だめっ!!」
親の脛かじり七光り金髪マッシュルームヘヤ顎割れＤＱＮに女の子がそう言うと……
「ぷへェっ。まずうっ!!く…くそ甘ェ!!砂糖が入ってんぞこりゃ。塩だろうがふつうおにぎりには塩っ!!」
「だ…だって甘い方がおいしいと思って…!!」
「こんなもん、食えるかボケッ!!こんな物こうしてくれるわ!!」
　ヘルメッポは、おにぎりを踏み潰した。
「ああっ!!やめてよ!!やめて!!食べられなくなっちゃう!!」
「ひ…ひどい、あの子がせっかく作ったのに…！」
「あぁ、もう良い…おい、このガキ投げ捨てろ!!」
「……は？」
　ヘルメッポの護衛で一緒に居た海兵はヘルメッポのその命令が聴こえなかったのか生返事で返してしまった。

「塀の外へ投げ飛ばせっつったんだよ!!おれの命令が聞けねェのか!!親父に言うぞ!!」
「は…はい、只今っ!!」
「いやああ!!!」
「「!.」」
　ドサッ…!
「……!!」
「きみ…大丈夫!?なんてひどい奴なんだ…!!」
「コビー、君この女の子を町に連れて行ってくれないか?」
「え?ルドルフさんとルフィさんは……」
「俺達は、ちょっと用事が出来たから…用事が終わったらすぐに町に行くから。」
「分かりました。じゃあ行こうか…」

　コビーは、女の子を連れて町に向かった。
「さてっと、ルフィ。用事を終わらせてコビーの所に早く行くぞ。」
「あぁ…」
　ルドルフは、ルフィにそう言って塀の向こう側にいるゾロの所にルフィと向かった。
「!.なんだてめェらまだいたのか。ボーッとしてると親父にいいつけられるぜ」

「先も、ルフィが言ったが俺達は強いからな。大丈夫だ」

ルドルフは、ゾロにそう言った。

「おれたちは今一緒に海賊になる仲間を探してるんだ」

「海賊だと？ハン…！自分から悪党になり下がろうってのか御苦労なこって…」

「おれの意志だ！海賊になりたくて何が悪い!!」

「コイツの言う通り、海賊になりたくて俺達は仲間を探してる。お前にだってやりたい事はあるだろ？」

「確かに、おれはやりたい事はある。だから一ヶ月ここにいるつもりだ。あのバカ息子が約束（やくそく）してくれた」

「本当にあの親の脛かじり七光り金髪マッシュルームヘヤ顎割れが約束を守るかな……」

「……約束を守らなかったら、死んだ後に呪い殺す…」

「怖いことを言うね」

「……ふーんそうか。でも、おれなら一週間で餓死する自信あるけどね」

ルフィ達は、そう言ってゾロの元から離れて町に向かおうとした時…

「おい！ちょっと待て」
「ん？」
「何だ？」
「それ…とってくれねェか？」
　ゾロは、ルフィ達にドロのかたまりになったおにぎりをとってくれと頼んだ。
「おいおい、いくら何でもお前それは……」
「ルドの言う通り、食うのかよこれ。もう、おにぎりじゃなくてドロのかたまりだぞ？いくら腹減ってててもこりゃあ…」
「ガタガタぬかすな。黙って食わせろ落ちてんの全部だ!!」
　ルフィは、ドロのかたまりになったおにぎりを掴みゾロの口の中に入れた。

　バリッバリッモグッ!!モグッ!!バリ!!
「……!!……!!……!!……!!」
　ゴ…ゴクン!!!
「!!」
「だから言ったろ、死にてェのか？」
「全くだ…」

「う、うるせェ。ゴブッ…あ…あのガキに伝えてくれねェか…!!」
「？何を」
「「うまかった、ごちそうさまでした」…ってよ」
「！……はは！」
「あぁ、分かった。」